

大阪市立大学難波宮址研究会

難波宮址の研究

研究予察報告第三

古代都京址の研究は、古代国家解明のためにすぐれて重要な意味をもつものであるにもかかわらず、著手されてから日も浅く、未だ十分な進展をみるに至っていない。今日明確に宮殿址と認められるものは、藤原宮・平城宮のみであり、これらに加えて、わずか長岡京がほぼ推察可能な段階にあるに過ぎない。

今度『難波宮址の研究』が、難波宮址研究会の手によつて、前二回に引きつづき三冊目の研究考察報告として公刊されるに至つたことは、このような都京址研究の現段階において、研究の進展に重要な寄与をなすものと言わねばならない。

本書の構成は次の如くである。山根徳太郎氏「孝徳天皇長柄豊碕宮の研究」・滝沢真弓氏「黄金分割」と建築の比例問題」・藤原光輝氏「難波宮址第八次・第九次発掘調査報告」・沢村仁氏「難波宮址第十次発掘調査略

報」・直木孝次郎氏「記紀を中心とする古代難波年表」・〈附録〉山根氏「難波宮発掘調査について」。

山根氏の論稿は、論点は多岐にわたるが、いろいろの視角から文献を駆使されて長柄豊碕宮を法円坂町一帯の当該地に比定し得ることを論じた力作である。滝沢氏は、石田茂作氏が奈良時代の寺院建築に「黄金截」がみられるという見解に対して、ギリシヤ以来のヨーロッパの数学・美学上の問題を整理され、単純に「黄金截」という概念を日本古代の建築に導入することの危険なることを論じておられる。藤原氏の報告において注目されるのは、聖武天皇難波宮址と推定される廻廊址に先行する廻廊址が発見され、それらが、①前者に比して小規模なこと、②柱穴に焼土を含むこと、③この遺構に伴う瓦の発見されないこと、④堅穴住居址の埋立てられた上に構築されていることなどから、長柄豊碕宮に比定されるものと推定していることである。本稿は山根氏の論稿と合せて、本書の中心をなすものである。沢村氏の報告からは、前二者の中間に位する遺構が確認されたことが知られ、今後の調査研究が期待される。直木氏の作成された年表は古代難波研究の史料を整理

されたもので研究者に多大の便宜を与えるものと信ずる。尚、附録の山根氏の一文は、これまでの調査の成果と経過を要約されたもので、本報告書を始めて手にする人にとつてはよき配慮といわなければならないであろう。

以上、要領を得ない紹介を試みたが、本書の内容はこれにつきるものではない。先例の示す如く都京址の調査は長年月にわたる不断の努力を必要とする。すでに八年、延べ五百余日にわたる、困難な条件をおしての、調査団のたゆまざる研究に、私は深い敬意を払うとともに、今後の御健闘を祈つて紹介の筆をおきたい。

(本文八九頁・英文二九頁・図版五八・実測図五・陸地測量部「天王寺」(明治十九年)「吹田」(同十八年)二万分一地形図ヘコタイプ)昭和三十五年三月 大阪市立大学 難波宮址研究会発行 非売品

(原 秀三郎)

新訂増補国史大系

尊卑分脈

尊卑分脈は周知の如く室町時代以前の諸家の系図を集大成したものであつて、公家武家